

## 生涯2度目の特別なオリンピックピクチャーに思うこと

校長 宮本 歩

昨年五月に、令和へと元号が変わり、あっという間に年が変わって令和二年になってしまった。今思い起こすと、西暦二〇〇〇年になるときに、私の新婚旅行のヨーロッパで一緒し、その後も交流があった経済評論家の小関哲哉さんから「さあ、嘘・偽りの時代からやっと『本物の時代』になる。二十一世紀は本物が再発見される時代だ。」とお話をお聞きして、わくわくとした気分になったことが懐かしく思い出される。あれから二十年が過ぎたが身のまわりを見回すと「いまだに、なんと嘘・偽物が多いことか・・・」残念で仕方ない。元号が変わり一年が過ぎようとする今、再度「本物とは何か」について考えることが大切ではないかと思う。

あらためて振り返ると日本が大きく変わるチャンスは、東日本大震災の後の数年間にあったように思う。東日本ほぼ全てで電気、燃料、生活物資が不足する状態になり、西日本や世界各国から、大変有り難い援助の手が差し伸べられる中、東日本では限られた物資や電気を、有効に利用したり、色々なものを分け合うという流れができた。この時「絆」ということが人々の心を結びキーワードとなり、大変心強く感じた事を思い出す。

「もの」に何不自由な生活が当たり前のようにならないうちに思われていた中で、あの数年間は、人々に今の生活は当たり前じゃないことを教え、資源は限られていることや、生活に必要な物資が様々な人々の活動のつながりで、はじめて自分の手に届くことなど、「忘れかけていた重要な事実」を再認識するための大きな試練の時期だったと思う。その中で「助け合うことの大切さ」や「他を思いやることの大切さ」「ものを大切にすることの大切さ」を多くの日本人が感じたはずである。

今、東日本大震災から十年近くが過ぎ、平成も終わりと令和を迎えて、日本人の感覚はどうなっているだろうか。開催国としてラグビーワールドカップが行われ、オリンピックの開催が今年の夏に迫る中で、また再び経済至上主義や、「自分やその周囲の人にとって都合が良ければいい」と言うような個人主義の風潮などが、大きく頭をもたげて来ているように感じるのは、私だけだろうか。東日本大震災の後に幾度となく起こった大きな災害や、大きな国家的な行事が開催される度に、様々なメディアやSNS上などでは「絆」「おもてなし」などと言う耳障りのよいキーワードが氾濫するが、ほんとかかな？と「冷めた目」で見えてしまう自分が、何故かそこにいる。これらのキーワードは、使い方によっては「みんながくなのだからくしななければならない、くするのが当たり前。それができないのは変。」といった全体主義的な考えを誘導するためにも利用可能だからである。

ぜひ、中学生や高校生の若い、新鮮な感性で世の中の様々な動きをじっくりと見つめてみて、検証して欲しい。そして、歴史を振り返ると、百年、数十年単位で変化するものには、なかなか本当に大切なものを見つけることは、難しいと思うので、この日本の中で、千年昔から、変わることもなく人々の心の中に生き続けてきた大切なものは何なのか。また、これから千年先の日本人に伝えたい大切なものは何なのかを自分なりに考えてみて欲しい。

自分の気持ちや身のまわりの当たり前に見える出来事に対する感覚を、一度リセットしてみたい。皆さんには、令和二年のオリンピックピクチャーを、「本物とは（本当の意味は）何か」を見抜き、「将来に残したい、大切なものは何なのか」を行動で実践できるような「自分」になるための、第一歩を踏み出す「一生の思い出に残る年！」にして欲しいと思う。